

シリーズ「遺跡を学ぶ」

159

氷河期の 大石器工房 ピリカ遺跡

長沼孝・寺崎康史

新泉社



氷河期の 大石器工房 ―ピリカ遺跡―

長沼 孝・寺崎康史

【目次】

第1章 「ピリカ」のドラマ	4
1 ダム建設と遺跡の発見	4
2 遺跡をとりまく環境	14
第2章 旧石器人のドラマを求めて	22
1 大型石器と細石刃	22
2 多数の焚き火跡	25
3 石器のまとまりの意味	27
4 どんな石器がみつかったか	35
5 石器づくりを復元する	37
6 ピリカ旧石器人の石器づくり	40
第3章 装身具の発見	48
1 日本初の旧石器ビーズ	48
2 ビーズと垂飾の特徴	51
3 ビーズ類の年代	57
第4章 北海道とピリカ遺跡	61
1 北海道南西部の旧石器遺跡	61
2 ピリカ遺跡の位置づけ	63
3 石材の種類と産地	70
4 良質の石材を求めて	77
第5章 保存と活用	82
1 石器をつくり、使う	82
2 日本の旧石器を代表する遺跡へ	83
3 遺跡の魅力を伝える	84
4 ピリカ遺跡の将来	89
参考文献	92

編集委員

勅使河原彰(代表)

小野 昭

小野 正敏

石川日出志

小澤 毅

佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 「ピリカ」のドラマ

1 ダム建設と遺跡の発見

北海道の南西部、渡島半島おしまはんとうにある今金町いまかねちょうに「美利河」という地名がある。「美利河」は「ピリカ」と読み、なんとも心地よい響きの言葉である。それはアイヌ語の「良い」「美しい」「豊か」といった意味で、その地名は集落を流れる「ピリカベツ川」に由来する(図1)。北海道全域にアイヌ語地名は多いが、「ピリカ」がつく場所は意外と少ない。ピリカベツ川の美しさと豊かさは古くから際立っていたに違いなく、かつて、この地を訪れた幕末の探検家松浦武四郎もその清澄さと透明さに感嘆している。

美利河地区は、今金町の東部、後志利別川しりべしとくべつとピリカベツ川、チュウシベツ川の三本の川の合流点で、現在は美利河ダムとそのダム湖がある(図2・3)。この地域は、明治から昭和にかけてはマンガン鉱石の採掘がおこなわれた鉱山があり、明治三〇年ごろには鉱夫が九〇〇人以上

もいたともいわれ、かなりのにぎわいをみせたところでもある。また、江戸時代には砂金採掘がおこなわれ、現在でもその痕跡をします水路や石積みなどが各所に残っている。ダム湖ができる以前の旧河原では少量ながら砂金が採取できた。七〇戸ほどが暮らしていた旧集落はダム湖の底となっているが、現在の集落はダム湖に面した高台にある。そして、集落背後の丘陵上には広さ二〇万平方メートルにおよぶピリカ遺跡などがある。

ピリカ遺跡とは

ピリカ遺跡は、ダム建設を契機に発見され、発掘調査がおこなわれた。調査では、旧石器時代の生活の様子を知ることができる焚き火跡や石器製作跡が確認されるとともに、北海道の旧石器文化研究の基軸となる石器群の層位的な確認と石器製作技術の解明につながる



図1・ピリカベツ川

丸山(標高674m)周辺に源を発し、美利河地区で後志利別川・チュウシベツ川と合流する。最上流部には秘湯・美利河温泉があるが、現在は土砂崩れのため行くことができない。調査時には何度か車と徒歩で訪れたことがある。

探掘のための土質調査をおこなった地質コンサルタント会社の飯田直雅さんが、土質調査のために開けた試掘穴から数点の石器を発見し、それを市立函館博物館に持ち込み、旧石器時代の石器であることが判明した。

後志利別川は、国土交通省が公表している全国の一級河川の水質ランキング日本一に毎年のようにランクされているわが国屈指の清流である。しかし、幾度も大洪水が発生していたことから、その洪水調節を含め、流水の正常な機能の維持、かんがい用水の補給、発電の四つの目的で一九六九年ごろから美利河ダム建設が計画された。

美利河ダムの構造上の特徴は、軟弱地盤での施工に適した「ロックフィルダム」と一般的な「重圧式コンクリートダム」を合わせた「複合式」ということで、堤体の長さは一四八〇メートルにおよび、河川を横断して建設されるダムでは日本一の長さになる。「ロックフィルダム」は大量の粘



図3 ●美利河ダム湖
中央やや右側の直線的な護岸後方が現在の美利河集落、遺跡はその後方の丘陵部。ダム湖手前の堤体は、直線的なコンクリート部と曲線的なロックフィル部が連結している。

良好な資料が得られた。さらに、日本ではじめて旧石器時代の装身具である石製小玉（以下「ビーズ」という）が発見された。

その後、遺跡内での工事は中止となり、遺跡は現状保存され、出土品は重要文化財に、遺跡の一部、九万九〇九〇平方メートルは国の史跡に指定された。さらに史跡のガイダンス施設として重要文化財を含む出土石器などを展示した「ピリカ旧石器文化館」が建設され、遺跡の保存と活用などが進められている。ゼロからはじまった遺跡をめぐるドラマに終わりはないが、現在までの主要なシーンをふりかえってみることにしよう。

遺跡の発見

ドラマのはじまりとなる遺跡の発見は、意外にも地質コンサルタント業者からもたらされた。一九七八年六月、美利河ダム建設に必要な粘土



図2 ●北海道南西部の遺跡とピリカ遺跡の位置
ピリカ遺跡は、すでに知られていた樽岸遺跡と大関校庭遺跡のほぼ中間にあり、その発見と調査は渡島半島の旧石器時代遺跡の内容充実に貢献した。

土と岩石で堤体をつくるもので、建設現場近くでの良質な粘土の確保が不可欠。そのための土質調査が美利河の丘陵でおこなわれたのである(図4)。

発掘調査が変えた開発計画

その後、ダム建設工事が進み、美利河の丘陵での粘土採掘工事が具体化する。そこで、石器が発見された二つの地点、A地区(採草地登り口)一二六四平方メートル、B地区(土質調査試掘穴周辺)一四五平方メートル、合計一四〇九平方メートルについて、一九八三年五月の連休明けから調査期間二カ月の予定で北海道埋蔵文化財センターが発掘調査することになる(図5)。この時、調査を担当したのが、筆者(長沼)である。

調査が進むとともにA地区は保存状態が良好で、ほぼ全面から石器が出土することがわかった。これにより、予定された二カ月の期間内に調

査を終えることが困難となり、一部の石器集中区域一七六平方メートルについては、さらに翌年調査を継続することとなった。また、調査予定区域外にも遺跡の範囲が広がることが予想されたため、一九八三年の七月と一〇月に北海道教育委員会による再度の試掘調査が実施された。その結果、遺跡はA地区の南東側一帯、東にのびる舌状部と南側に隣接する丘陵緩斜面およびそれにつづく舌状部、一万平方メートル以上に広がることが明らかになった。

試掘調査の結果にもとづき、遺跡のとり扱いについてダムを建設する北海道開発局函館開発建設部と調査を実施した北海道教育委員会が協議をおこなったところ、遺跡が確認された範囲全体の発掘をおこなった後に粘土を採掘する工程では、ダム建設に大きな支障をきたすことが想定され、粘土採掘の場所が変更された。その結果、遺跡は現状保存されることになった。



図4 ● 土質調査がおこなわれた美利河の丘陵
丘陵の最も高い部分の標高は180m前後。中央やや右側の青い屋根の建物(旧美利河小学校)の後方が標高155m前後のA地区。



図5 ● 北海道埋蔵文化財センターによる発掘調査
図4の反対方向の丘陵高位部から、A地区の調査状況を撮影。調査区中央の緑色の部分は土層観察ベルト。

調査主体	遺跡名	調査地点	調査面積	調査の年度・目的・概要	
北海道埋蔵文化財センター	美利河1	A地区	1264㎡	1983・1984年、粘土採掘のための調査	
		B地区	145㎡	1983年、粘土採掘のための調査	
今金町教育委員会	美利河1	C地点	150㎡	1991年、草地造成のための調査。大型石刃石器群発見	
		ピリカ	D地点(史跡指定内)	368㎡	2000～2003年、史跡整備のための調査。剥ぎ取り複製を作製して覆屋を建設し、「石器製作跡」として展示公開。細石刃石器群、「剥片尖頭器」類似石器群の発見。放射性炭素年代測定で、1万8000年前との測定値が出る
			E地点(史跡指定内)	64㎡	2000・2001年、史跡整備、内容確認のための調査。細石刃石器群、尖頭器石器群、少量ながら縄文時代の土器、石器群が出土
北海道教育委員会	美利河2	範囲確認調査		1983年、草地造成にともなう発見。細石刃石器群の発見、一部現状保存	
國學院大學	美利河1	K地点	148㎡	1996～2003年、國學院大學考古学演習として調査。C地点と類似した大型石刃石器群の発見	
	美利河3		71㎡	2004～2006年、國學院大學考古学演習として調査。	
	美利河4		12㎡	出土状況を確認するための試掘調査	

表1 ● 美利河地区でおこなわれた発掘調査
本書では「美利河1」と「ピリカ」を合わせた全体を「ピリカ遺跡」としている。

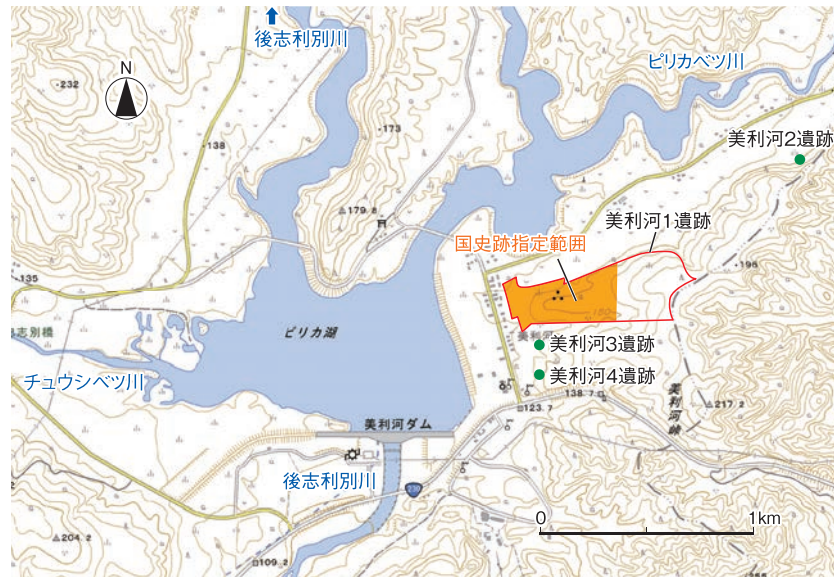


図7 ● ピリカ遺跡と周辺の遺跡
ピリカ遺跡はピリカベツ川左岸の東西方向に延びる舌状の丘陵にあり、南側の小沢を挟んで美利河3遺跡、さらに小沢を挟んで美利河4遺跡がある。

広大な出土範囲
遺跡がある美利河地区の丘陵での粘土採取が中止されたことから、今金町ではその後の遺跡の保存と活用をおこなうため、遺跡の範囲や詳細な内容を把握する目的で、一九八七・八八年に遺跡がある丘陵一帯一六万三〇〇〇平方メートルを対象に確認調査をおこなった。

調査は一平方メートルの試掘穴を東西方向に二〇メートル、南北方向に一〇メートルおきに設け、最終的に試掘穴は五八〇カ所となった。山林部分では背丈をこえる根曲がり竹にはばまれ、放牧地では調査作業員が牛に追われるという一幕もあったが、低位(標高一三〇～一三五メートル)、中位(標高一五〇～一五五メートル)、高位(標高一八〇メートル前後)、それぞれの段丘面の平坦部に遺物が濃密に埋蔵されていることが判明し、その範囲は約一二万五〇〇〇平方メートルにおよんだ。



図6 ● 国の史跡指定範囲と発掘調査地点
指定地範囲東側の発掘調査がおこなわれたA・B地区、C・K地点は、現在、採草地となっているが、大きな地形改変は受けておらず、環境保全が図られている。



図8 ●ピリカ遺跡D・K地点の発掘調査
D地点（上）は低位段丘面、K地点（下）は高位段丘面に位置し、どちらの段丘面においても大量の石器が埋蔵されていることが明らかになった。

確認調査の結果にもとづき、町では民有地と国有地を買い上げ、条件の整った九万九〇九〇平方メートルが一九九四年四月に国の史跡に指定された（図6）。その際、遺跡の名称を「美利河1遺跡」から「ピリカ遺跡」とした。

このほか、ピリカの丘陵一帯では筆者（長沼）が調査したA・B地区以外にも、今金町と國學院大学による発掘調査がおこなわれている（表1・図7）。町がおこなったC・D・E地点などの調査は、帰省の途中、美利河1遺跡の発掘現場に偶然立ち寄り調査に参加してこの遺跡のとりこになり、その後、今金町初代学芸員となった寺崎（本書もうひとりの筆者）が担当した（図8上）。

國學院大学がおこなったK地点およびピリカ遺跡の沢を挟んだ南側の美利河3・4遺跡の調査は一九九六年から二〇〇六年まで一一年間継続実施され、小林達雄、吉田恵二、永峯光一、加藤晋平、藤本強、谷口康浩さんらが指導にあたった。毎年平均すると二九名の大学生が参加し、大学院生などを含めると一一年間でのべ四八四名が参加した。美利河特有のジリ（北海道地方に夏季に発生する濃い海霧）のせいで、一〇日間のうち一日しか発掘作業ができなかった年もあった。しかし、整理作業をする石器には事欠かなかったため、発掘および整理作業など、考古学の基礎的作業の経験の場となり、多くの学生がピリカの丘から巣立っていった（図8下）。

これら一連の調査成果から、ピリカ遺跡全体の広さは二〇万平方メートルを越えることが明らかになった。